

[2]

氏名	邵金琪 <small>しょう きんき</small>
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	文博第 292 号
学位授与の日付	2024 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	日本近代文学における〈上海〉の表象に関する研究 —昭和戦前・戦中期の諸相—
論文審査委員	主査教授 関 肇 副査教授 増田 周子 副査教授 山本 卓

## 論文内容の要旨

本論文は、昭和戦前・戦中期の日本近代文学における〈上海〉の表象について、都市、社会、歴史および文化受容を中心にアプローチする方法を用い、同時代の言説空間を探り、多民族・言語・文化が重なり合った様相を考察したものである。論文の構成は以下の通り。

### 序章

#### 第一部 プロレタリア作家と「革命都市」の上海

第一章 雑誌『文芸戦線』における日中文化交渉——北伐戦争時期を中心——

第二章 里村欣三「動乱」論——「革命都市」としての上海——

第三章 前田河広一郎『支那から手を引け』論——「北伐革命軍上海入城前後」を手がかりに——

小結

#### 第二部 女性作家と国際都市の上海

第一章 租界生活とアイデンティティ——池田みち子「上海」を読む——

第二章 池田みち子「国際都市」論——統制下の暗潮——

小結

#### 第三部 「時局的」な作家と戦時上海

第一章 都市と人間の思想——多田裕計「長江デルタ」論——

第二章 黒木清次「棉花記」論——上海郊外の農民たち——

小結

結論

参考文献

## 初出一覧

序章では、まず幕末の上海への貿易船派遣にはじまる歴史をたどり、経済、教育、居留日本人の人口の推移をふまえ、1920年代から30年代の上海が、革命都市、自由都市、犯罪都市などのさまざまな顔を持つ多様性のある国際都市への発展し、日本の中国侵略が本格化する1932年の第一次上海事変、1937年の第二次上海事変、太平洋戦争中の上海が実質的に日本軍の支配下に置かれた時代が終わる敗戦までの日本人と上海の関わりを論じている。さらに、これまでの先行研究において、芥川龍之介や横光利一などの上海体験に注目が集まる一方、女性作家やプロレタリア作家の上海体験、および上海の日本語メディアにおける日中文化交渉の実態を中心とした研究が十分になされていない現状を明らかにし、本論文の意義を説いている。

第一部「プロレタリア作家と「革命都市」の上海」は、上海の革命運動について、プロレタリア作家の〈上海もの〉および雑誌『文芸戦線』における日中作家の交流を分析したものである。

第一章「雑誌『文芸戦線』における日中文化交渉——北伐戦争時期を中心——」では、中国国民革命以来、中国の革命運動に強い関心を示した雑誌『文芸戦線』を取りあげ、日中のプロレタリア作家たちの交流から、日中のプロレタリア運動における文化交渉について考察し、雑誌『文芸戦線』の作家たちがどのように日本国内のプロレタリア運動と結合し、中国北伐戦争を支持したかを分析し、編集方針の変化から掲載される評論と文学作品とが政治運動と結びつく可能性を明らかにしている。

第二章「里村欣三「動乱」論——「革命都市」としての上海——」では、上海における国民革命をその渦中に投じた外国プロレタリアートの視点から捉えた里村欣三の「動乱」について、語り手の「私」の革命に対する態度に注目しながら、革命都市上海のイメージについて考察し、革命に参加する群集、便衣隊、山東兵などの登場人物や団体を分析し、プロレタリア作家の革命への認識がどのように作品に取り込まれたかを検討している。

第三章「前田河広一郎『支那から手を引け』論——「北伐革命軍上海入城前後」を手がかりに——」では、前田河広一郎と里村欣三の共作である『支那から手を引け』を取りあげている。中国の第三次北伐戦争期を中心に、上海で発生した一連の暴動を描いた本作について、主人公でありながら中国の革命運動に参加する理由と日中無産階級革命運動の関連性を分析し、多様な人物と出来事が小説の中に繰り込まれていることから、舞台となった上海の状況を探り、上海三次暴動に関する描写と、対応する革命運動の歴史と比較し、そこに託された小説の表現の特徴と前衛的な革命思想を明らかにしている。

第二部「女性作家と国際都市の上海」は、池田みち子の〈上海もの〉を通して、第二次上海事変後の上海に住む日本人たちが、多国籍社会におけるアイデンティティをどのように認識しているか、そして戦局の変化の中でどのように生き抜こうとしたかに注目したものである。

第一章「租界生活とアイデンティティ——池田みち子「上海」を読む——」では、池田みち子の最初の〈上海もの〉である「上海」について、租界生活の具体的な描写、登場人物の心理などの分析により、上海に住む日本人女性の自己認識と、混血児のアイデンティティの変化を中心として考察している。日本の国威が徐々に高まっていくなか、上海に住

んでいる日本人たちは、自分のアイデンティティを強調し、さらなる権利を求めるようになるが、魔都上海は、いかなるアイデンティティを持つ人間をも包み込み、人々が自由に生きることができる「国際都市」であることを読み解いている。

第二章「池田みち子「国際都市」論——統制下の暗潮——」では、池田みち子の最後の〈上海もの〉である「国際都市」を取りあげている。日本人コミュニティである虹口を主要な舞台とし、日本政府が提唱した統制が実施され、上海の経済が回復しつつあるなか、日本人同士の不和が生じ、中国人と日本人の行き違い、外国人と日本人の衝突など、事変に明け暮れた一九四〇年の上海の光景を描いた本作について、日本人コミュニティにおける「会社派」と「土着派」にはどのような対立があったのか、そして上海に住む中国人や外国人がいったいどのような生活をしていたのかを、当時の上海日本人居留民や上海の経済情勢を考慮に入れながら分析している。

第三部「『時局的』な作家と戦時上海」は、汪精衛による日本の傀儡政権が南京に成立し、日本の国策言説が一番強かった時期に、上海の日本語メディアに発表された多田裕計と黒木清次の作品を論じている。両作家の作品は、発表当時は「時局的」と評価され、芸術性はあまり認められなかったが、日本占領下の上海に身を置いた作家たちは、どのように上海の要素を取り入れたのか、これまでの〈上海もの〉と異なる工夫がいかになされたのかを検討している。

第一章「都市と人間の思想——多田裕計「長江デルタ」論——」では、現地文学のはしりとして、「芥川賞海を渡る」のキャッチコピーで注目された、多田裕計の芥川賞受賞作である中篇小説「長江デルタ」を取りあげ、中国の上海、南京、杭州とそこに生まれた思想の葛藤が克明に描かれた作品と捉え、都市の描写や対聯の分析によって、三都市の性質の違いを明らかにし、人物造形の分析を通して、作中人物がその居住する地によって、思想や行動原理を制御され、運命づけられていく過程を明らかにしている。舞台の移り変わりによって、現地に住む日本人、「和平派」中国人、「抗日派」中国人の立場から見る三人の思想が変化していくが、その関係性を整理し、多田裕計が当時の中国の都市事情および中国人の思想や行動を理解したうえで作品の創造を行っていることを論じている。

第二章「黒木清次「棉花記」論——上海郊外の農民たち——」では、小説の前半が第十八回芥川賞候補、完結版が第十九回芥川賞予選候補となった黒木清次の「棉花記」について、上海郊外の農村地域における中国人と日本人との矛盾に注目し、農民たちの生活の苦しさや日本人技師たちの勤勉さに焦点を当てることによって、農村地域における抗日思想への批判や日本の統制に不利な言説を弁解するという小説の役割を考察している。そのうえで、物語の時間と棉花増産をめぐる出来事を中心に小説の世界と実世界との違いを分析し、戦時中の上海の郊外における農民たちの土への愛着という物語の底流を確認し、作品を再評価している。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、従来、芥川龍之介、村松梢風、横光利一らの上海体験を中心に「魔都」としてのイメージが強い上海について、特定の作家や文学流派、限定された時代などに焦点を絞るのではなく、一九二〇年代から四〇年代の長期的なタイムスパンで、多様な作家、発表媒体、政治的文学的な立場による作品、しかも従来の研究においてあまり注目されてこなかった対象に徹底して取り組んだものである。

第一部「プロレタリア作家と「革命都市」の上海」においては、プロレタリア文学運動の指導的役割を果たした雑誌『文芸戦線』に注目し、前田河広一郎と里村欣三という二人のプロレタリア作家が、その発表媒体を舞台にして、中国国民革命運動、特に上海三次暴動にどのように関わったか、さらに当時の日中文学者の交流の実態について明らかにしている。

第二部「女性作家と国際都市の上海」においては、三田派以外にも誌面を提供して新進作家を輩出した昭和戦前の第三次『三田文学』に着目し、同誌に作品を発表した女性作家の池田みち子の〈上海もの〉を取りあげている。従来の研究が男性作家を対象とするものが多い中で、女性としての視点から、第二次上海事変後の上海の多国籍社会におけるアイデンティティを読み解くという問題意識にもとづき、丹念に作品を分析している。

第三部「時局的」な作家と戦時上海においては、第一部や第二部における研究対象とは対極に位置づけられる国策出版物の雑誌『大陸往来』、および文学の力を借りて文化工作に協力するというプロパガンダ性の強い同人雑誌『上海文学』に発表された、「時局的」な作家の作品を対象として考察している。

公聴会では、雑誌『文芸戦線』の編集方針の変化やその後の展開、前田河広一郎と里村欣三の共作となった事情、日本人作家が中国に与えた影響、都市社会学的なアプローチのあり方などが問われた。作品の発表された当時の歴史的社会的背景について、同時代の日本で発行された資料だけでなく、中国で発行された資料にもあたり、従来の研究の誤りを糾すなどの一定の成果を得たことは評価できる。その一方で、小説そのものの読みが、解釈の根拠を内在的に示すという点において弱く、歴史的な事実を作品に機械的に当てはめることになっているのではないかという意見も出された。

以上のように、今後の課題とするべき点はあるものの、邵金琪氏が本論文において昭和戦前・戦中期の日本近代文学に描かれた〈上海〉の表象について、革命運動、多国籍社会、戦時の特殊性などの多様な観点から考察し、同時代の日中メディアの言説空間の新たな様相を提示したことは評価できる。

邵金琪氏は、2020年4月に本学大学院博士後期課程に入学して以来、4ヶ年ほどの間に、学術論文4本（すべて査読あり）、学内外の学会での研究発表7回（うち4回は海外における国際学会）があり、それらの研究成果に改訂をほどこし、新たに執筆した3本の論考を加えてまとめた本論文は、専門の分野において自立した研究者としての十分な能力を示すものといえる。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。